



聖語

衆生既に信伏し

質直にして意ろ柔軟に

一心に佛を見奉らんと欲して

自ら身命を惜ます

統

日什上人置文諷誦抄卷上

講師、船八十老比丘 阪本 日桓 講演

増田 聖道 速記

其十三

次止過八恒沙之弘經三召本化寂光之地涌因彌勒不知之疑問顯釋尊久成之遠本此の四句卅三字は法華經本門の從地涌出品の大意を述たる文て有ます此の涌出品には序分と申す經文と正宗分と申す經文と此の二の經文が有ます此の御品の最初の爾時他方國土諸來菩薩摩訶薩と申す經文より去て汝等自當因是得聞と申す經の文までが序分と申します夫より爾時釋迦牟尼佛告彌勒菩薩と申す經文より去て此の品の終の教化令發心而住不退地と申す經の文までが正宗分と申します又た初の序分の經文に二科の序分の文が有ます此の品の最初の爾時他方國土と申す經文より去て能於如來發隨喜心と申す經の文までが本化の居士の涌出する爲の序分て有ます次に爾時彌勒菩薩及八千恒河沙と申す經文より去て汝等自當因是得聞と申す經の文までが此土他土の迹化の菩薩達が本化涌出の居士を釋尊へ疑問する序分の經の文て

有ます其所で今の諷誦章の第一の句と第二の句と此の二句十七字は涌出品の最初の爾時他方國土と申す經文より去て能於如來發隨喜心と申す經の文までが本化の居士の涌出する序分の經の意を述たる文て有ます第三の一句八字は經文の爾時彌勒菩薩及八千恒河沙と申す經文より去て汝等自當因是得聞と申す經の文までが此土他土の迹化の菩薩達が本化涌出の居士を釋尊へ疑問する序分の經の意を述たる文て有ます第四の一句八字は經文の爾時釋迦牟尼佛告彌勒菩薩と申す經文より去て品の最末の教化令發心而住不退地と申す文までの正宗分の經の意を述たる文て有ます如是涌出品一品の中には數々の法門が有ます其數々の法門を僅に四句卅三字の少數の文字の内に毫も洩さず御陳述になりましたは實に如意寶珠の文字にして仰て信受し俯して稽首し奉るべき妙章て有ます獨り此の文のみにあらず誦文一章 悉皆斯の如く數々の妙義を含藏して有ます諸法華經迹門十四品の説法が畢て今爰に法華經本門の從地涌出品を御説になりました來意を辯じますれば遠由と近由と申す二種の來意が有ます其遠由と申すは上の寶塔品を講じましたとき委しく辯じて閉せました通り法華經迹門の寶塔品の付屬有在の佛勅が法華經本門の壽量品に於て始覺近成の迹佛を破廢開會して本覺久成の本佛を説き顯す遠き來由て有ますから迹門の説法が畢ると直に此の本門の從地涌出品を御説になつたので有ます夫れから近由と申すは

此の涌出品の最初の經文の爾時他方國土諸來菩薩と申す文の下に他方の國土より來りし諸の菩薩達が法華經を滅後に流通する功德の深重にして其福德の高大なる旨を釋尊が説き玉ひたるを聞いて誓願を發し我等一同所領の本土に還歸せずして此の娑婆世界に止住し廣く妙法蓮華經を流通致さんと請願しました然るに釋尊は右の請願を御許可なく止善男子不須汝等護持此經一と仰せられて御差止になりました此の御差止の止善男子の文が總て本門の壽量品に於て爾前述門の始覺近成の迹佛を破廢開會して本門の本覺久成の本佛を説き顯す近き來由て有ますから述門の説法が畢ますと直に此の法華經本門の從地涌出品を御説になつたので有ます今の諷誦章に止過八恒沙之弘經とある此の文の中の止の一字の上に辯じたる遠近の二の來由を合藏して有ます學生達注意して拜讀なされかし止過八恒沙之弘經一召三本化寂光之地涌一文此の二句の文は上に於て經文を擧て辯じて聞せました通り本化の居士の涌出する序分の經文の大意を述たる文て有ます此の本化の居士の涌出する序分の經文に三種の科段が有ます一には他方の國土より來れる迹化の菩薩が己が所領の本國に還らずして此の娑婆世界に止まりて此の法華經を弘通致さんと釋尊へ請願したる一科が有ます今の涌出品の最初の經文に爾時他方國土諸來菩薩と申す文より去ての四行一句の經文が有ります二には如來不許の科と申して迹化他方來の菩薩が此の土の弘經を

請願致したれども釋尊は御許可が有ません此の經文は爾時佛告と申す文より去ての四行七字の文が有ります三には本化下方の居士の從地涌出の文て有ます此の經文は佛説是時娑婆世界と申す文より去て算數譬喩所不能知と申す經の文が有ります此の第三の科には開命故來弘法故來破執故來顯本故來とて四故來と申す肝要なる法門が有りますれば是れは他日別席に於て講じて聽せる事に致しませう今の諷誦章の止過八恒沙之弘經一と申す一句八字は經文の第二の科の如來不許の文の意を述たる文て有ます次の召三本化寂光之地涌一と申す一句八字は同く第二科の如來不許の文の中の所以者何と申す經の文より去ては本佛の釋尊が勅命を下して本化の居士を召出す經の意を述たる文て有ます然れば則今の諷誦章に於ては前の經文に對すれば迹化他方來の菩薩達の此土弘經の請願の文が有ります又た後の經文に對すれば本化の居士の涌出の文が有ります然れども前後の經の意味は次止過八等の二句十七字の内に合藏して有ます諷誦章の上の止過八等の一句の内には迹化他方來の菩薩達の此土弘經の請願の意味が合藏して有ます如何となれば如來の此土弘經を不許したるは何を不許したるて有かと申せば是則迹化他方來の菩薩が此土弘經の請願を不許して止善男子等と御差止になつたので有ますから此の如來不許の文を擧れば此の中に自ら他方來の菩薩達の此土弘經を請願したる文の意味が含

藏して有ます次に召本化寂光之地涌と申す此の一句八字は同く第二の如來不許の科の經文の中の所以者何と申す文より下の經文は別命の文とて本佛の釋尊が別して勅命を下して本化の居士を召喚したる事を説たる文て有ますから此の別命の經の文を擧れば本化の居士の涌出の文の意味が合藏して有ます如何となれば師父命じて召に豈不來の子弟有んや故に四故來の最初に聞命故來と申して本師釋尊の召喚の別命を聞て本化の弟子が涌出し來りたるを聞命故來と申します故に天台大師の法華文句の涌出品の釋の文には師嚴道尊鞠躬祇奉如來一命四方奔涌故言從地涌出品と有ます如來一命四方奔涌とある師父命するに即來至したるにあらざるや故に如來別命の經文を擧れば此の内に自ら本化の居士の涌出の經の意味が合藏して有ます左すれば今の諷誦章に於ては前後の經の文を述る事を闕きたるといへども其意味は止過八恒沙等の二句の内に合藏して有ますから一品の大意を述るに毫も妨が有ません斯の如くにして我開祖大聖人の御文章の奇特不思議なる事彌々神力別付の其一人本化垂應の居士の御筆なる事仰て信敬し伏て拜讀すべきて有ます倍釋尊が過八恒沙之弘經を差して許さる仔細と又た釋尊が本化寂光之地涌を召出したる仔細に就ては前三後三の六義の法門とて前の過八恒沙の迹化の菩薩の此の土の弘經を差して許さるに三義があり又た後の本化寂光の居士を召出に三義が有ます先前三の釋

義を辯じますれば一には他方來の菩薩達は各々所領の本務の國土があつて其國土の衆生を濟度せねばならぬのである然るに此の娑婆世界に留りて住居すれば各々己が所領の國土の本務の化導の責任を廢するから世界悉旦の利益を失ひますよつて釋尊が止善男子と差止たので有ます二には迹化他方來の菩薩達は此の娑婆世界の一切衆生に對しては大乘の妙法蓮華經に結縁したる事年近く日淺き故に設令此の土に留て衆生を濟度しても高下の利益が有ません左すれば爲人悉旦の利益を失ひます故に釋尊が止善男子と差止たので有ます三には迹化他方來の菩薩達に此の娑婆世界の弘經を許すときは下方の本化の居士を召出す因縁を失ひます召出さる時は始覺近成の迹佛を破廢して本覺久成の本佛を開顯する事が出来ません始覺近成の迹佛を破廢せざれば對治悉旦の利益を失ひます本覺久成の本佛を開顯せざれば第一義悉旦の利益を失ひますから釋尊が止善男子と差止ましたので有ます是が今の諷誦章の止過八恒沙之弘經と御書になつた前三の釋義の法門て有ます次に本化の居士を召出す後三の釋義を辯じますれば一には本化上行等の大菩薩方は本師の釋尊久遠本地本因妙の修行の時よりの弟子なれば本師釋尊の所證の三大秘法の本法を授受するは師弟の當然の事なれば世界悉旦の利益が有ますから本化の居士を召出したので有ます二には本化上行等の大菩薩は久遠五百塵點劫の往昔より此の娑婆世界に住居して一切衆生

を濟度して三大秘法の妙法に結縁せしめたる事廣大甚遠にして此土他土に垂迹して利益を興る事無窮なれば爲人悉旦の利益が有ますから本化の居士を召出したので有ます三には本化上行等の大菩薩が下方より涌出すれば始覺近成の迹佛を破廢しますから對治悉旦の利益が有ます又本覺久成の本佛を開顯しますから第一義悉旦の利益が有ます依て本化の居士を召出したので有ます是が今の諷誦章の召本化寂光之地涌と御書になつた後三の釋義の法門で有ます此の通に迹化の居士の弘經を差止るにも三義があり本化の居士を召出にも三義があつて實に深い因縁の有る事であり有ます

因彌勒不知之疑問顯釋尊久成之遠本一此文此の上の一句八字は此土他土の迹化の菩薩が本化の居士の從地涌出したるに就て疑を懷き釋尊に尋問したる事を述たる文で有ます下の一句八字は本佛の釋尊が此土他土の迹化の菩薩の疑問を答へ給ひたる經文の意を述たる文で有ます先初の一句八字の文を辯じますれば迹化の彌勒菩薩を始め此土他土の同じ迹化の菩薩達が本化の居士の從地涌出したるに就て疑念を懷きて釋尊に尋問したるに四種の意味が有ます一には最初寂滅道場の華嚴會の三七日の說法の座席を始として鹿苑の十二年方等の十六ヶ年般若の十四ヶ年已上四十二ヶ年間の說法の會座に於て十方より來集したる諸大菩薩其數無量恒河沙の大多數なりといへども我れ補處の智力を以て是れを見に一人た

に法華經本門壽量品の開迹顯本の説を開示しましたなれども迹化の彌勒を始め一會の大衆は毫も本佛本化の密意を識得する事が出来ません然すれば第一義悉旦の利益を失ひますから此の利益を得る爲に疑念を懷て佛に尋問致したるので有ます此の四種の不識得が有ましたから佛に尋問したるので有ます今の諷誦章に因彌勒不知之疑問と御書になつたは是の事て有ます此の注釋に法華文句の九の卷十一の文を引き曰密開壽量一是第一義即是一部最極理豈非第一一引き舉て壽量顯本の第一義悉旦を講じ結釋して申すには一部最極理の語に深く意を留よとて大に理顯本を稱歎して有ますが是れは之れ本宗に於て強て尊貴とする法門では有ません當家に於て壽量品に於て破迹するは對治悉旦で有ます事顯本するを第一義悉旦と立て此の事顯本の中に無始より前後なく理顯本は攝收して有ると立るが本宗の宗義にして事跡理徳と申す法門は是て有ます當家の法門を能く了解せんとならば日受上人の事觀錄及び佛界緣起章等を不斷熟讀して居れば理本事迹の台宗の法門に眩惑される事は有ません學生達注意なされよ顯釋尊久成之遠本一文此の一句八字は本佛の釋尊が彌勒菩薩を始め此土他土の迹化の居士達の疑問に對し御答になりたる經文の意を述たる文で有ます其經文と申すは涌出品の爾時世尊說此偈已告彌勒菩薩と云ふより去ての文が本佛の釋尊の御答の文で有ます今

りとも不知の者なし然るに今此の從地涌出の居士方に於ては一人たりとも識知したる人なく且又我れ十方の諸佛の國土に遊歴して諸佛を觀奉り諸佛一切の海法會は咸く諸記し識得したれども此の諸大菩薩衆の履歴に於ては毫も識得する事なく何れの國より來臨し何れの國へ退去し玉ふ其去來を推度し尋求すれども其履歴を識得する事が出来ません然すれば世界悉旦の利益を失ひますから疑念を懷て佛に尋問致したのてす二には彼の本化涌出の諸大菩薩は先進先覺の人なり此の彌勒等の迹化の諸菩薩は後進後覺の人にして後進後覺の輩は先進先覺の人の大功徳大善根ある事を識得する能はざる者なれば從て自身の善根功徳を生ずる事がならぬ然すれば爲人生善の利益を失ひますから疑念を懷て佛に尋問致したので有ます三には彼の本化涌出の諸大菩薩は本來下方の寂光の本國土より同居方便實報の三國土に垂迹示現して別頭は一切衆生を教化なされる此の諸大菩薩の眞身の内證と應身の外用とは此の迹化の彌勒等の居士の境界にては毫も識得する事が出来ません内證と外用とを識得する事が出来なければ衆生を濟度する道を識得する事が出来ず從て濟度する衆生の病を識得する事もならず其病を識得せざれば難治破惡の利益を失ひますから疑念を懷て佛に尋問致したので有ます四には本佛の釋尊が此の法華經を滅後に流通せしむるに託して本化の諸居士を召出したました本化の居士は本佛本師の嚴命を奉じ來て密

法華文句の九の卷十一に此の經文の講談が有ますそれを取意して辯じて聽せませう文句に云く經文の爾時世尊說此偈已といふより去ては大段第二の本門の正説段で有ます此の正説段の文をまた分けますれば先づ三段有ます一には今の涌出品の經文の爾時世尊說此偈已と申す文より去て壽量品の一品畢るまでの經文が正しく始覺近成の迹佛を破廢して本覺久成の本佛を開顯致します是を開迹顯本又は開迹顯遠の法門とて一大事の經文で有ます二には分別功德品の最初の爾時大會開佛說壽命長遠と申す文より去ては惣じて法身の記前を授たる經文で有ます三には爾時彌勒菩薩從座而起と申す文より去て十九行の偈の文の畢るまでが迹化の彌勒菩薩が己れが領解したる事を述たる經文で有ます又初の開迹顯遠の經文にまた分つて二段有ます初の涌出品の爾時世尊說此偈已と申す文より去て品の結末の教化令安心而住不退地と云ふ文までが畧開迹顯遠と申す經文で有ます次に壽量品の一品は廣開迹顯遠と申す法門があり壽量品の廣開迹顯遠の經文には動執生疑と申す法門が有ます是等の法門の講義は他日別席に於て辯じて聽せませう倍此の開顯の名目には開迹顯本と稱する事があり又は開迹顯遠と稱する事が有ます同物にて此の二種の異名のある所以は義便と申す釋と文便と申す釋と此の二義の不同がある故に從てまた二名の不同が立つて有ます義便と申すは釋義の使

とて義理の便にて辯ずるときは述佛を開して本佛を顯すと釋するが故に開述顯本と呼び經の文字上の便に依て辨ずるときは近の字は涌出品の經文には得道甚近とも得道來甚進とも説て有ます又遠の字は涌出品には我從久遠來と説き壽量品には久遠若斯とも甚大久遠とも説て有ますから經文に説てある文字の上から立て呼て使の宜しきは進成の佛を開して遠成の佛を顯すと辨じますから開述顯遠と稱します此の通に義便と文便とによつて其名は異なれども其法躰は同一にて毫も差別は有ません如何となれば始覺進成の述佛を開して本覺遠成の本佛を顯すを斯の如く開述顯本と開述顯遠との二の名目を立た者て有ます此の諷顯章に遠本と書て有ますが遠の字は文便に依り本の字は義便に依て御書になつたので有ます

子供と暗黒

▲子供が少し知覺神系の發達してまゐります頃、大抵は生後七八月から二歳の頃になりますと、殊に暗黒所を厭がるやうになります、非常に體格が能く生れた子供て物の音などには少しもビク付かないものでも、どうも暗黒を好みません。其甚だしいのになりますと、非常に泣くのがあります。

▲それは決して暗所に、子供の厭がるものがある譯にはありません、子供が燈火を見ましてフウ／＼と云ひまして悦びますのとは反對で、唯暗黒な陰鬱なのが自然に子供に不快の感と與へるからであります、昔の人が申しました様に、暗所に魔がをるのも何んでもありません。

▲ですから暗所を恐れまして、少し大きくなりましても、兎角暗所に行くのを厭がるやうな憶病な子供に育てまいとするには、其暗黒や陰鬱を何んとも思はない強い心を養はなければなりません、夫れには大人からして暗所を恐れないやうにしなければならぬのです。

▲母や姉が暗い座敷や庭へ行くのを怖がつて、一々燈火を照けて行くやうではなりません、子供は先づ暗所を厭に感じてをる所ですもの、之を見ましては厭と思ふ感の上に怖いと謂ふ情を起します。此感情が長く續きますと習慣となりまして遂には大きな身體をしてをりまして夜道や暗室で震へるやうになります。

不受不施史料 (六)

梶木日種

四 不受不施禁制後の分派

この時日講は二幅の本尊並に日堯の條目を手許に留置いた、日堯の條目と云ふは堯了狀とも稱へて、曩に日堯より内信濁法と法立とは隔なく同行同拜して苦しからぬ旨を備前備中へ指示した處が、日堯の甥て弟子である立賢と云ふものが「この指教は國方の古風に背き日述日浣の仰にも相違する故、諸人猶豫を懷き誹謗の端にもなるべきか」といふ意見を祐甫といふ者を以て日堯に告げしめた、その時日堯は「當時流僧は不受の隨一なり、若しうの指教と國方の法式と相違あらば此の方の理由を尋ね究めたる上にて取捨すべし、何ぞ直に國方の法式を信敬して、此の方の義を輕賤するや」と、内信者所持の本尊を拜して苦しからぬ等清濁混亂の法門を認め、日堯日了連判して立賢に與へたものである、この條目を書いたのが天和三年のことで、翌貞享元年二月十日に日堯は死去した元來この日堯日了等は流僧ではあるが派内では二流以下の人物で、流罪に就て漸く世間に名を知られた位のとであるから、かく法義に誤謬を來たすに至つた、日講はこの條目が世間に流布すれば日堯が折角不惜身命の行爲も水泡に歸するとを惜み、永く手許に條目等を留置き、前顯日了へ與へた書面

に續述する通り、日堯に疵の付かぬやう又日種に裁決にも妨なきやうに取扱ふたものである」されば日了は日講の配意を大に悦んで同年八月左の返簡を差出した

五月十九日の御尊翰六月初に到來再三奉拜上候

一、最前は覺隆院一派の儀に付御六ヶ敷儀共申進候處に、御懸に御料簡被遊早々尊書給誠以存不淺忝奉候

然ば兩人の者共對顔の儀遠慮に思召候段御尤に存候へ共、垂御慈悲御助被成下候段、兩人の者に許改悔御經頂戴仕、法燈違背罪障懺悔の一札仕、生々世々難有忝奉存候、誠以難有儀何とも可申上様も無御坐候作憚私に御禮を被仰上可被下候と申候

一、覺隆院並一派の眞俗御料簡被遊候通私異見仕候は、如何にも諸事奉任に上意領掌可申上由にて御座候合點仕候、誠に久敷儀に御坐候處に、尊師の御懸に御料簡被遊候故早速領掌仕偏に御厚恩難申宣忝奉存候、覺隆院儀も御兩尊師御料簡の上は何角と私儀申立候事憚多奉存候、間萬端御請可申由に御坐候、領掌能仕候可安御心候(下畧)

一、覺隆院方へ改悔の御本尊被遣被入御念候

一、春雄院御本尊、日堯因州へ授與の本尊と同じ趣にて信謗同一の授與書にて候事無紛候、然ば春雄院を謗法と落居候へば堯師へも難題懸り候、扱日相より此方へも無談合

春雄院の本尊謗法と被_レ致_レ落居_一候事も理不盡の儀と存候
尊師の御料簡にて堯師にも疵不付様に被_レ成亦日相の落居の
筋をも無_レ妨碍_一様に御料簡被_レ遊候儀感入申候、扱又相談の
上にて後代迄も格式を定置度御料簡の旨わざ／＼被_レ仰越候
是は別て結構なる事難_ニ申宣_一覺候(中畧)如何にも別紙の通
合照仕候、此方の一義相濟候て重て可_ニ仰越_一の段御尤に
奉_レ存候、殊に亦拜不拜與同不與同の儀も面々の心入にて
分別替り申事無_レ餘儀_一御坐候と被_レ仰下_一候段一々領掌
仕候

一右の日堯日相の兩義(乃至)本意にて可有之候、此文言深重
の儀殊勝千萬有難_レ感歎仕候、委細は重て可_ニ申上_一候恐
惶謹言

八月廿二日

日了判

日講導師

貴答

かくて日指の覺隆院は日講の扱といひ日了の勧めもあり、
旁々同年八月十九日付にて法燈違背私立法等の改悔状を認
め、江田源七を便として日講に謝罪した、依て日講は覺隆の
志を嘉みし、即ち日指方眞俗總代として本柳院及び市郎太
夫の兩人を早速上京せしめて日相へ改悔すべき旨を命じた
然るに日指方は日相に對して尙ほ惡_ニ講誦_一しつゝあつたから
岡山の日相の信者より容易に改悔を赦されぬやう日相に申告

した、處へ日指方より同年十月二十二日に前記兩名が惣代改
悔に上京した、すると日相は「今更日講へ願書を遣はした
ればその返事来るまで相待つべし」と申開けたから、兩人は
その儘歸國してその趣を覺隆等に語り、これ俸として益
す日相を惡口誹謗するとなつた、のみならず同年十一月九
日に江田を再び日向に使はし「二幅の本尊並に日堯の條目返
されたし、この後日相へ隨ふと成り難く、津寺方へ和合も致
し難し」と申立てた
るこて日講は「本尊と條目は永く此方に預り置くべし、若し
破法せしむるときはるの罪日堯に歸し由々敷大事なれば、隨
分信心道念を以て京都の首尾を濟ませ津寺方とも和合すべし
相師より來狀あらばその様子申遣すべし、先々歸れ」と種々
教誡を加へて源七を歸國させたが、日指方は一向平氣で京都
への運をしない、かくては日講が却て日指方に與同する姿に
なるから日講翌眞享三寅年二月廿八日日指方より本柳院等に
續いての人物二名を選ばしめ、即ち受正院及び石坂嘉右衛門
を日指方眞俗總代として改悔の一札を徴し日講の指揮に従ふ
べく誓はしめた
然るに日指方は我情日々に加はるのみで一向母が明かないか
ら、同年五月日講は侍者の内備前出身の岡村善助に歸國を命
じ親しく旨を諭さしめた、岡村は即ち先づ讃州へ渡り夫より
備作三ヶ國を巡り、翌卯年春二回まで日向に往來して日講の

内意を聞き種々盡力したが纏まらない、依て尙ほ三清、心鏡
竹内清左衛門等有數の人物に旨を傳へて百方曉諭を加へたが
結局不調に終つたのである「この頃江戸の日庭と云ふ邪僧が
日堯の立義に同意したから、日指方は加勢を得て彌々我情を
募り、終に日了日庭等と示合せ「日向より二幅の本尊等取戻
し、これを始經導師の旗印に押立て、日堯の條目の通りに弘
通すべし、若し背く者は謗法に落さん」と確定した、この事
が元祿二年正月に日向に聞へた、その前年辰八月五日に日了
は死去したから、日講が折角數年盡力したとも水泡に歸した
依て日講は斷然堯了庭及び春雄共、彌々謗法と決斷して日相
等へその趣を通報した、その年三月に覺隆より書面を添へ
て讃州の須股長兵衛備前の逢澤清九郎を便とし二幅の本尊及
び條目の返戻方を催促し來たつたから、日講は即ち堯了狀
能破條目」と認め又二幅の本尊彌々謗法の旨添狀して返却し
た茲に至て日指方は全く清派より除門されたのである

是れより日指方では除講記を著はして日講の「能破條目」を斥
け、堯了狀の通り濁法と同座同行して始經導師するとなつ
た、故に日指一黨を導師派と稱へたのである、願ればこの
諍論の起りは濁法の始經導師を糾明したのであるが結局日指
の一黨が我情を張つて終に導師を唱道するに至つた、してみ
れば日指の一黨こそ眞に矛盾である、自家撞着である、自立
廢忘である、破法である、謗法である、實に慙むべきもので

ある
この導師派に又奥方、里方といふ二派がある、これは備前の
金川より奥を奥方と云ひ、金川より里を里方と稱へたもので
奥方は一名先例派と云ひ、先例を守りて濁法の導師を勤めな
い、而かも覺隆等とは一味であつた、即ち導師派中の不導師
派で、所謂二途不攝の鳥鼠であつた(併し後に至て不導師派
に歸入した一類もある)又里方の中には制紙、不制紙、或は
智法院方といふ三派があつたから、日指一黨は四派より成立
つた各々互に我慢を募つたものである、又この導師派を庭門
流とも堯門派とも稱へた、これが今の金川の不受不施派の前
身である
又江戸の日庭といふは寛文法難の折青山自證寺を出て、不受
を立てたが、清濁の同行同拜を勧めたもので、後に世罪に依
て佐渡に遠島された、彼れは世出共邪謬に陥つたが、堯了等
と同じく導師派の首領と仰がれた

その頃同じく佐渡阿佛房を出寺して江戸に居つた日養と云ふ
が、日庭の邪義を認め京都日相に通知し、日相と共に日庭方
の謗法を改めさせた、それ故江戸でも日養日庭の兩派に別れ
て居つたのである、この日養は日述日洗日講日相等と同志の
清派である
備作地方では清派たる津寺方を導師日指方に區別して不導師
派と稱へた、又日講の支配を受けて居つたから講師派とも稱

へて居つた、今の講門派は即ちこの津寺不導師派の末流であ

以上は導師不導師の分派を述べたのであるが、尙ほ右の外に日題派と云ふのがある、即ち中正論等の著者京白川心性寺の日題の一流である、これは京妙覺寺の僧善學院といふものが九州へ下つた後に「筑紫法義物語」と題して、寛永法難の折に九州へ追放された小湊日延が筑紫にて謗法の所行があつたと書き立てた、この善學は伊豫吉田の流僧大野法蓮寺日完とは無二の入魂であつて、この法蓮寺は流僧であり乍ら人に知られた謗法人で、日延のとを非議したが、善學は輕卒にそれを信用した、又日題は派内では第二流の人物で高慢の質であつたが、能くも取糺さずに善學の語を容易く納れ、第一流の僧が日延を呵責しないのは謗法だと稱へて、自から別派したもののである、これは日指事件よりは前の事で、これにも種々の話はあるが、この一派は只岡山縣下に僅少の信徒のみが現存して居るといふ計りて、殆ど消滅したやうなものであるから委しくは述べぬ
次には清派の傳燈、天保法難、及び現在二派に關するを述べやう

學生の三要件

鈴木 晚村

一、自發的奮勵心あり
凡そ學生たるものは、必ず自發的奮勵心なかるべからず、若し、此心なきものは、如何に教師の懇篤なる薫陶をうくるも其の效果なきものなり、然るに小學より中學に進む頃は、恰も自己の奮勵を以て、父母教師に依頼をうけてなすもの、如く思惟するなきにしもあらず、さればその終學の法いつれも他動的にして自動的ならざるを見るならん、噫二十世紀は、生存競争の時代なり、斯かる不健全なる思想によりて、いつてこの激烈なる實力競争の渦中に游泳するを得べき、吾人は須らく自發的奮勵心を以て、生存競争の武器を鍛錬せざるべからず。

二、日に向上せよ

吾人はその日その日に、幾分なりとも勉學して、日と共に向上するを要す、決して明日あるを頼むことなかれ、日晷一たび去れば永遠に過ぎ去るなり、嗚呼今年の今日は、人生一度遇ふ所の新らしき経験なり、空しく費す如きことあるべからず、大なる成功をなすには必ずしも一時に大なる努力を要せず、大なる努力は永續すること難し、健全なる成功は、かへつて小なる處にあり、されば世の人々小なることは、迂として、顧みざるもの多し、是れ思はざるの甚だしきものなり、嗚呼大海の水も濫賜の泉より出て、十里の長堤も一點の蟻堆より倒れざるに非らずや

三、天真爛漫なれ

學生たるものは天真爛漫なるべし、我が知らざることは、十分質問すべし、然るを價値なき問ひを發しなば、人に笑はれやせんやなど、躊躇し躊躇の中に終ふる如きことあるべからず、常に學生の云はす、徒て吾人は虛榮心を抱くべからず、寧ろ麻布に包まる、玉ならんも鏡羅に包まる、土となる勿れ、笑はるを恐れて問はざれば、一生知るべからず、尾藤二洲曰く之を知る事一日なれば、一日猶は百年の如し無知の百年之れを醉生無死といふ、長きも亦何ぞ益せん、朝に聞いて夕に死するも、亦可ならずや吾人は宜しくこの覺悟を以て學業に勵むべきなり、(むさしの)

宗教の必要を論じて唯我

獨尊の語に及ぶ

左の一節は今成乾師の講演にして記者の筆記せしものなり若し旨趣及び言語等に錯誤あらば是は記者の責任なり(五生)

予は佛教の精神たる唯我獨尊の意義を説明しやうと思ふのであるが之を述ぶるに先ちまづ宗教の必要を論じて諸君の注意を乞はんとするのである何故と云ふに日本の青年諸氏が宗教に關すること、し云へば直ちに宗教の弊害たる迷信を以て宗教の眞面目となし、宗教の眞意義を解せず却て眞正なる宗教家が宗教の神聖を汚瀆するものなりとして排斥し且つ忌避するものを認めて眞の宗教と誤解するものがある故に宗教の語と云へば如何に光明ある眞理を含み如何に有益なる意義を有して居るにもせよ我關せず焉て聽流しにする風がある併し是は大なる誤謬と云はざるを得ない抑も吾人々類の生活問題の根底に於て其眞意義を教へ安心立命を得せしむるものは宗教を措て他に求むることが出来ないものであるされば西洋に於ては無宗教の人とし云へば精神上の不具者と看做し交際場裡に起つこと困難であるやうである又從て宗教上より生ずる結合と云ふものは非常の勢力を有し居るものであつて如何なる力を以て之に對抗するも到底打ち勝つことが出来ないのであるやうの理由は如何なる宗教を信するに

もせよ苟も宗教心を有せるものはその信仰の場合に於て無限絶大なる信仰を拂ふと同時に感應道交の關係を生ずるのである(非眞理なる宗教にもせよ)故にその本尊に對する時語を換へて之を言へば吾人の眞面目を赤裸々に發露するものである從て同一信仰を有する相互の關係と云ふものは同一慈母の懷にいだかれて居る兄弟のやうであつて其親密なる粘着力と云ふものは非常に強大である

日露戦争の初めに當て露國は歐米列國の同情を得んが爲めにこの宗教心を利用して基督教國と佛教國との戦争なりとなし自國の勝敗は直ちに基督教國の興亡に關する如く言ひふらしたしかし日本に於ては努めて宗教に關係なく單に人道の爲めの戦争なることを辨明し且つ又た日本の宗教家は其事實の眞相を證明せんが爲めに宗教家大會を開きて佛教徒も基督教徒も露國の國教たる在日本の希臘教徒も萬口一聲に日露交戦は單に世界公道の爲にして宗教には何等の關係をも有して居らぬことを説明したのである歐米各國も亦其眞相を認知し敵國の狡猾手段に欺かるゝものはなかつた然しなから宗教の異同が外交上にも至大の關係を有して居ると云ふことは露國の態度に於ても了解することが出来る又米國ポーツマスに於ける講和談判の當時日曜日(即ち基督教徒の安息日)に於てウィット等が基督教會堂に參詣せるの一

事は如何に米國人の同情を引ききたるかは其當時の新聞に依て諸君に紹會せられてある又小村全權等も亦止むなく會堂に行きて同情をつなき止めた事も報せられた公平なる米國人は日本が人道の爲めに戦ひたるを認め多大の同情を表しつゝありしにも拘はらずたゞ一小寺院に参拜するの運速によりて變動を來たせりと云ふに至ては大に注目すべき價値があると思ふされば基督教國に於ては如何に無宗教者であつても交際場裡に立つ以上はアーメンを真似るの止むなきに至るのである此を以ても宗教なるものは如何に勢力のあるかは諸君の了解せらるゝ事と思ふ

既に宗教の必要を認め又其勢力の強大なるを知るとすれば如何なる宗教に依るべきかは實に諸君の撰擇に就て大に考慮を要すべき問題なりと思ふ宗教は猶食物の如し其必要なると同時に其良否を極めて取捨するの必要がある現今我國に行はるゝ宗教が歐米に宣傳せらるゝ宗教に劣るとせば之を捨つる弊履の如しと雖も我國の宗教にして格段の眞理を有し吾人を益するに於て勝るならば吾人に自ら信仰するのみならず更に歐米人等にも傳るは實に吾人々類の本分にして又我國の名譽と勢力とを發揮する所以であらうと思ふ我日本は人倫道德の上に於ても又智能の上に於ても優に世界の意表に出て各國の驚嘆するところなるが如くに宗教の上に於ても神聖なる安心立命を興るならば實に多大の敬愛を受けることであらうと思ふ且つや我國に於て發達進歩したる宗教にして外人の歸依する所とならば外交の如きも順風に帆を揚ぐるの成効を見るに至るであらう彼の心にもなき虚偽の信仰形式の參堂を以て僅かに同情をつながんとするが如きは如何に外交上の弊裁なればとて帝國の使臣として心苦しき次第であらうか予は慨嘆の至りに堪へざる次第である彼露國は自國の領土を擴張すると同時に會堂を建て又自國の國語を以て律せんとするが如きは經世家の大に參考に資すべき材料であると思ふ昔豊太閣が朝鮮を經營するに際し漢語を用ゆるを却けて飽造國語を以てせんとしたるが如きは其經綸の抱負讚美の外はないのである更に之よりも同化力強き宗教を以て海外に宣傳するは東帝國の威望をして旭日東天の勢あらしむ所以であると思ふ

されば是より歩を轉じて我國に關係因縁の深き佛教の精神に就て之を論議し以て諸君が取捨撰擇の參考にまで供せんと欲するのである

元來我國に存在する佛教は其宗派幾多にも分れ其主義主張數十種の多きに及び互に相争ふて下らざるが故に佛教其物の歸趣要點をして何處に存在するかを知るに苦しましむ然れども佛教は元と佛陀の一心より宣傳せられたるものなれば又必ず一に歸する所あるべき理の當然である其千差萬別なるが如く見ゆるも畢竟其一に歸せしむる手段方法に過ぎないのである

左なくしては安心は得らるゝ等なく又佛陀のれ自身も安心悟道なきのみならず精神の錯亂者を以て目せらるゝも是非なかるべししかし決して其様なことはない筈である然らば其一とは何ぞやと云ふに各宗互に議論あるべしと雖も何人も異論なき佛陀の宣言によりて説明するは最も穩當にして且つ簡易なりと信す

佛陀の此世界に降誕せらるゝや其淨々熟柿の如き赤子は直ちに七歩を行きて右手に天を指し左手に地を指して天上天下唯我獨尊と喝破し給へりとは諸君が既に兒童の時に於て其父母より耳にせられたる話である此唯我獨尊の語は佛陀の精神を表現せられたるものであつて此意義を了解せば一切經は讀まなくとも佛教の根本義は解るのである然らば唯我獨尊とは如何なる意義であるか之を説明するには我の一字に二様の解釋あることを知らねばならぬ則ち小我と大我との區別及び干係である小我とは吾人凡夫の迷情に拘束せられて宇宙の眞理實相と隔歴りて融通を見ず相待差別の境界に甘んじて居るのである大我とは佛陀大覺者の境界にして宇宙の眞理實相と融合し絶待平等の大智見より差融自在の大活動を現するものである然らば小我大我は根本的に相違して居かと云ふに其本体に於て決して違ふことはないのである喩へば一心は十藏の如く其十藏を開き財寶を自在に運用するのは貴顯長者と云はるゝが如く吾人の小我を開發して一切の活動を現はすものが大

我と成たのである又た土藏を開くことが出來ず從てその土藏に財寶あることを認識せざるものは貧窮下賤と云はるゝが如く吾人は大我の活動を没却して居るから小我と云はるゝので予は大我小我の區別及關係を述べたれば是より我とは如何なるものなるかを論じその變轉の状態を御話しやうと思ふさて我とは如何なるものかと云ふに之は何人も容易に答ふることの出來ない至難の問題である抑も我の衣食住は我であらうか曰く否之は我が身体の生存上必要品であつて我に非ず我身體は我なるか曰く否我心の發動すべき機械にして我に非ず我が感情智力意志等は我なるか曰く否我の或る動機に觸れて活動する心的作用にして我に非ず然らば何を我なるか我は無きものなるか曰く否我なしとするも我にして我有りとするも我なり然らば其の我とは心以外にあるものか曰く否心を離れて我あるべからず然らば如何なるものか之れ我なるか予は心の中心點即心的作用の立脚地を以て我なりと言いたいのである心の中心を以て我なりとせば我を擴むれば宇宙を包容す我を縮むれば密に藏るのである故に我が感情智力意志等の心的作用の總てが我に統一せられ我身體及び四圍の團像の一切が我に歸向して我の範圍に属するものと云ふべきである茲を以て我の價値は其内容の實質と其範圍の廣狹とによりて定まる其内容眞善美に於て欠るところがあり偽惡醜を含ま其範圍到らざるところあるは吾人の所謂小我であつて

其内容眞善美を以て充たされ毫も偽悪醜を含まず時間の無始無終を貫き空間の無限に徹して宇宙の眞理實相は我に同化し智慧の光明は眞理其儘の發現となれば是れ所謂大我の實現であつて佛陀の境界であるこの我こそ唯我獨尊と云ふべきであらう故に佛陀は親ら自己の境界を述べて曰く惠光照すこと無量にして壽命無數劫なりと又曰大火に燒かるゝと見ときも我此土は安穩なりと又曰我も亦これ世の父なり諸の苦患を救ふものなりと佛陀の壽命は天地と共に限りなく佛陀の智慧は眞理と融合して明かに佛陀の慈悲は廣大にして到らざる所はない而も是れ吾人の小我が一轉し開發して大我となりたるものに外ならない故に吾人の本体を開發すれば佛陀と同じ唯我獨尊と稱するを得べし吾人が常住にまします佛陀の尊容を認め其慈光に接することを得るものはそれだけ吾人の小我が佛陀の唯我獨尊たる大我に接近しつゝあるのである「空飛ぶ鳥の聲を聞きては籠の中の鳥の出んとするが如し」とはこの謂にあらざれば客体の佛陀は主体の吾人と雖て同一なりと云ふことも謂ひ得べきである從て又た佛陀の住する寂光の淨土は吾人の住する穢土の本体と異なることなき筈である是れ小我と大我との相通する唯一線道ではあるまいか相待の絶待我に入るの門戸ではあるまいか佛陀は「唯だ一道あり」と説き「此の寶乘に乗して直ちに道場に至るべし」とも説いた然るに凡夫の悲さには之の見易き道筋をも發見する

ことが出来ず六道の街に迷ふて威儀尊容の佛陀を見奉つることが出来ないのは全く小我に満足して其主体の發現を欲せざるの致す處であらふ經には佛陀の實在は眞實なれども顛倒の衆生をして近かしと雖も見へざらしむ「説けり吾人の見解は常に顛倒して居る吾人の足は常に岐路に進むのである斯くして吾人は一歩一墮落の淵に趣きつゝある早く一大覺醒をしなければなるまいと思ふされど佛陀は吾父なり吾人は佛陀の愛子なり子は父の跡を承繼すべきであるならば吾人も亦佛陀とならねばならぬかく信仰を有して此境遇に到達すべき方法を了得すれば小我の一轉して唯我獨尊となることを決定したものである然るに彼の基督教の如きは唯一上帝の實在と愛の光とを説くに勉めたりと雖も吾人の主体を説くに於て欠く處もあり又基督教によりて神に救はるゝとするも僅に神の僕と成るに止まりて未だ神と成ることが出来ないとは非常な欠點ではあるまいか是れ決して吾人の理性を満足するものではない佛教は之に反して本佛(唯我獨尊)の實在を説き本佛の慈悲の大活動を説くと同時に吾人は本佛の愛子となり信仰の力さへあるならば必ず本佛と合一することが出来ると説くのである所謂佛教の根本は具存一休教(具とは自己の本体に本来具するものにして存は本佛の實在を云ふ而して其本佛の徳と吾人の本具とが一体なりと説くもの)にして宗教發達の極致なりと云ふも差支はない位である歐米人は夢にだも知

らざる宗教であつて此は日本人の專賣である佛陀は唯我獨尊の教を説き吾人は之の教によりて唯我獨尊となる之を成佛と云ふのである一度唯我獨尊の信仰に住すれば生死を解脱して常住なるを得慈悲智慧勇氣等あらゆる諸徳は自然と具備するに至りて社會の各方面に應同して如何なる事業にも献身的に大活動を試むべく政治家たり教育家たり實業家たるに論なく皆其職責が悉く菩薩行となりて唯我獨尊を發現するの資糧とすることを得るのである所謂大我發展の大方法であらふ以上は悉く其説を盡したる譯ではないが併し佛教の大精神は是以上の事もなからふと思ふ諸君願くは是の佛教の大精神を体得し安心立命を定めて各自其生活の業務に勉勵するを得るならば當に自己一身の幸福のみならず又た實に國家人類の幸福であると思ふ至囑々々南無妙法蓮華經

先生といふものを一の参考書と見て居ります、然るに私の關係して居る女學校などでは中々先生を試験するといふ様なことはありませぬ、無論女の方であるからでもありませうがあれこれと一々尋ねるばかりで一舉一動引張りあげねばならぬと云ふ様で依賴的であります。此等から私か唯一個人として一般に推しあてて考へて見ますと、せも男は獨立性に富んで居て、女は依賴性に傾いて居る様に思はれます、而して此依賴性其者が善いか悪いかは判りませぬが、私は其利用の仕方に依て善となり悪となると思ひます。

他人にはかり依賴すると途には獨立の仕事が出来なくなつて來ます、然し自分の心に満足することが出来なくつて、我身を宗教的信仰即絶對不可思議なるものに依託して、大慰安の下に自分の急激なる感情を制して行くことは結構であらうと思ひます、宗教は死んだ後の事を説くと思ふ人もあらうが、決してそののみでなく、此世の中に於て種々なる刺戟に堪へて行くことの出来ない、失望、苦境、悲痛と云ふ様な場合には何ものかに其心を依託して其苦境に慰安と希望を得ると云ふことが必用であります。『苦しい時の神頼み』と諺にも云ふ通り、人間は何時如何なる運命に陥るか豫知する事が出来るもの、而も日々の些細な事に就ても悉く憂へたりするの人情であるから、宗教の要は寧ろ刻々日常の事であると思ひます、熱病に罹つて居る時には平素から何時とな

女子と宗教

文學士 小川銀次郎

女の方はおとなしいから悪口を目の前で云ふ様なことはないが、萬事あゝしなさい、こゝしなさいと引張り擧げて行かねばなりません、男生徒は、新任の教員がえらいかどうかを試みるために、無理な質問をして先生を試験すると云ふ風で

ことが出来ず六道の街に迷ふて威儀尊容の佛陀を見奉つることが出来ないのは全く小我に満足して其主体の發現を欲せざるの致す處であらふ經には佛陀の實在は眞實なれども顛倒の衆生をして近かしと雖も見へざらしむ「説けり吾人の見解は常に顛倒して居る吾人の足は常に岐路に進むのである斯くして吾人は一歩一墮落の淵に趣きつゝある早く一大覺醒をしなければなるまいと思ふされど佛陀は吾父なり吾人は佛陀の愛子なり子は父の跡を承繼すべきであるならば吾人も亦佛陀とならねばならぬかく信仰を有して此境遇に到達すべき方法を了得すれば小我の一轉して唯我獨尊となることを決定したものである然るに彼の基督教の如きは唯一上帝の實在と愛の光とを説くに勉めたりと雖も吾人の主体を説くに於て欠く處もあり又基督教によりて神に救はるゝとするも僅に神の僕と成るに止まりて未だ神と成ることが出来ないとは非常な欠點ではあるまいか是れ決して吾人の理性を満足するものではない佛教は之に反して本佛(唯我獨尊)の實在を説き本佛の慈悲の大活動を説くと同時に吾人は本佛の愛子となり信仰の力さへあるならば必ず本佛と合一することが出来ると説くのである所謂佛教の根本は具存一休教(具とは自己の本体に本来具するものにして存は本佛の實在を云ふ而して其本佛の徳と吾人の本具とが一体なりと説くもの)にして宗教發達の極致なりと云ふも差支はない位である歐米人は夢にだも知

く積つた罪惡のために、天井の木理が鬼になつたり、壁や障子が焰々たる火に見えたりすることが聞々ありますが、實に之は人間の弱點であります。特に感情の強い神經質で所謂苦勞性である處の御婦人方には、宗教を信じて、無量壽にして無限の慈悲をもてる佛を心に信賴するとか、全知全能の神に依賴するとかして、心の不満足を充たし、間違つた考を起さぬ様にして行くと云ふことは、極めて必要なことでありませう、ツマリ其女性特有の依賴心を大きく利用し善に利用して絶對不可思議者に信賴して、家庭の主となり社會の一員として、働くことが、大切であらうと思ひます。

昔から宗教を信じなかつたものと、宗教を信じたものとを比較して見ると、宗教を信じた人の方が大事業をなして居ることは歴史が證明して居ります。婦人の方で例を取りますなら彼の源頼朝の妻であつた處の政子夫人であります。歴史で御承知の如く非常な佛教信者で尼將軍と云はれた人です。丁度其時代は鎌倉佛教が起つた時で、其心を鍛練して女性には得難い女將軍となつて、北條の家人を自由に動かして能く九代の間節儉力行、武士道を確立せられました。其一行の爲に就て訓戒となるべきものは澤山あります。今又西洋にも宗教に熱心であつて偉業を起した婦人が澤山あります。彼の中世紀の頃に英國と佛國が百年戦争と云うて其實百十六年程かゝつた長い戦争に於て、佛蘭西は散々に打破られて僅に一

州程残つて居るばかりで、眞に孤城落日、四面楚歌といふ境遇に陥つた時に、慨然としてジャンダークと云ふ牧畜者の娘で宗教を熱心に信じて居た少女が現はれ、先王の君カサリナから佛國の運命を挽回して新王を即位させて呉れよとのまられた夢を見、白衣を着て馬に跨り陣頭に立つて遂に英國を破り、佛國の根本を固めたのであります。其初めに國王に謁せんとして願つた時には狂氣者であるとして迫害せられたけれども、「妾は宗教を信するものなり」と云ふ大自信を持つて居たから、遂に王に謁して大事業を遂げました。其他國家的事業をやつた人とか家庭を圓滿に過ごした人は、多く信仰ある不可思議者に信賴して大活動をやつた方々であります。鬼も角つまらない事に自暴自棄したり泣いたりすることは駄目な談であるから、其自暴なり悲痛なりを是非一轉することが必要であることを確信致します。

目下の戦争で今日まで我軍は十三萬餘の死傷者を出し、露兵はこの數倍だと云ふ談であるから、親に別れ夫に別れて、憐れなる境遇に陥つて居る人が澤山ありませう。今日迄は親に依り夫に扶けられた身が今後如何になるであらうか杯と、種々なことを感じ、世を厭うて終には身を過つと云ふことがないでもないと思ひます。斯う云ふ時に當つて最も心を亂さず迷はず、満足して希望を認めることが大切であります。十何萬の同胞が死傷して、其親や夫に別れるもの其三倍か四

戰國の勇婦

善祐尼

須藤 求馬

倍に相當することでありませう、さればそれ等の人々に對して信仰を得させて慰安と満足と興へ、絶對の境遇に安住して行く様に、つとめさせることが必要であります。男子と雖も無論必用であるが、殊に苦勞性で依賴心の強い女子に對しては特に大切であると思ひます。さればたとひ戦争のために親や夫を失はない方でも、是非佛なり神なり信じて、心の慰安を得て貰ひたいものであります。食はず嫌なものは全く御免を蒙らねばなりません。譯の判らぬものでであると打ちやらすに當りて見ると其の眞味が判ることと思ひます。

名 月 如 是

仲磨の多き今年や月うるみ 村上貞藏

如來を 慈悲の手はふりはなされど汝等よ 下界に落つな力ゆるめて 信念てふことを

しつかりと佛のみ手にすかりけり 靈山まではなごはなすべき 四菩薩の像を京より姫路に送りて

法の海や佛を送る渡し守

昔室町の末つかた、伯々下部伯耆守と云ふ者の女、細川澄之に仕へて甚寵あり、女子一人を生む、然るに澄之は永正四年八月細川澄元に攻られて、洛西嵐山の游初軒にて自殺し、伯耆守は澄之を介錯して後、從士百七十人と共に切腹す、時に此女子母と共に往生院に隠れ居たりけるが、丹波は澄之の分國なり、内藤波多野を頼ばやと志て、愛宕山の月輪へかかり落行ければ、三好希雲の從士追かけ、其容色の勝れたるを見て此を犯さんとす、此女子まづ母を先へ落行かせ、自から逃れじと覺悟し、坂路の狭き岩の側に立て其士を待うけ、汝は我を見知りや、我は汝を知れりと云ふ、其士答て云く知らず、唯此山越をするを以て、世を避憚る人なるを知り、伴從のなきにて落人なるを知る、抑々我をば誰とか見知ると云ふ、女子笑て曰く、世を避憚るにあらねど、本道は兵士滿々たれば行に堪へず、伴從は元來召使ふべき分限なければ有るべき理なし、汝が推量一も中らず、汝は四國の叛臣三好希雲の從士なり、希雲天に悖り人に逆み、滅亡遠きにあらす、汝が運命も今盡んとす、何分はかなく雲雨の交を慕ふやと云ひつゝ、路傍の怪岩高さ四五尺許なるを、岸下に突落し、汝をも如斯すべきやと云ふ、其士願此女子非常の人なるを知り

て、心に疑ふと雖も、又止むべきにあらねば、尙進んで通らんとす、時に此女子小石を提ぐ取つて其士の肩間を狙つて投ず、謬まらず鼻梁に中り、魘夥しく流れれば俯になりて是を扱ふ處を、又石を投じて項にあつ、項やふれて眩み地に倒る、然して丹波に至り、内藤備前守貞正は母方の叔父なりければ、此家に入りて時を待つ、一日人來て月輪の坂路に壯士一人死し居たり、何人の殺せしや知らずと語る、此女子其男の物色を問へば、我礫に中りて死たるならむと思へども、謂はざれば知る人なし、後此女子神尾寺に入りて尼となり、善祐と云ふ、近畿の靈地を巡拜するを以て勤となせり、修行の次月輪に至り、其事を思出し、順逆二縁正邪一如の感を興し、遂に去るに忍びず、此邊にやと坂路を彷徨すれば、一基の卒都婆あり、怪みてこれを見れば、過去精靈某の文あり、月輪寺に入て問ひ訊せば、彼の礫に當りて死したる士と思はる、委細に推究れば、老僧一人語りて曰く、我は元來四國の者にして此精靈と共に三好希雲に従ひて細川澄之を殺して後、其女中の落行く跡を慕ひ、これを犯さんとせしに、却て其女の爲に礫に打れて此精靈は死したり、因果輪廻の恐しさに、我は出家して諸國を修行し、數年の後、こゝに來り此人の爲に卒都婆を遺立し、此二三月が間此寺に住持せりと涙を流しつゝ語る、此尼これを知らず顔に過んも情なしと我ころ其時の女なれと云いて、月輪寺の上人に請ふて、菩提の爲に、一日經書で供養したりとなん。

釋迦出離の年齢及び其動機

次 郎

釋迦出離の年齢に關し、世に流布する所の諸説紛々たり、余之に對して疑問を懐く者此處に年あり、其最も有力なる者二あり、一は十九歳を以て出家し三十一歳にして成道せりとす者、他は二十九歳を以て出家し、三十五歳にして成道せりとす者にして、共に是れ佛教の聖經中に於て其典據を有する所なり、而も現代學者社會に於ては後者を以て最も眞に近しと稱す。

其説に曰く
第一、釋迦が「カピラハツ」の宮城を脱出して山中に仙者を訪ひ、之に問ふに安心の要訣を以てせり、而して兩者問答の跡に兆す事も、其思想の深遠なる、識見の透徹なる、決して十九歳前後少年者の口吻と思はれず、斯る深遠博大なる思想を咀嚼同化せんが爲めには、少くとも三十歳前後に至るの年月を要す可し、是れ十九歳出家説の信す可らざる所以の一なりと。

第二、十九歳の若齡を以て天地の奧秘を極め、宇宙の大道を闡明せんとするが如き、眞摯なる大問題に撞着せん事は、實際に於て有り得可からざる所、凡そ人の斯る眞面目なる大問題に撞着し、痛絶深絶なる大煩悶を経験するは多く三十歳前後にあり、十九歳とは餘りに早熟に過ぎたり、是れ十九歳出家説の信す可からざる所以の二なりとて、井上博士の如き

は其實例として古今東西宗教家の實例を列舉せられたり、されど余を以て之を見るに、是れ甚だ不當の言なるを覺ゆ。

夫れ人は名々其天稟に於て異也、凡そ人の卅歳前後に於て始めて到達する所、天才偉能の士にありては二十歳前後に於て之に到達する必ずしも難事にあらず、耶蘇十二歳の時「エルサレム」の教會堂に於て長老牧師の間に坐し、且つ聞き且つ問ひ、其智慧の聰敏なる其應答の靈警なる、傍人をして怪異の念に堪ぬざらしめ、長老牧師をして舌を卷いて驚倒せしむ、記す可し耶蘇當時僅に十二歳なる事を、釋迦成超所の資を以て、常人の三十歳前後にして到達する所の者、二十歳前後にして之を到得するも何んぞ之を怪まん、凡そ天才は早熟なり、釋迦は天才中の天才にして、早熟國民中の早熟者なり、加ふるに當時の思想如何に多岐紛亂を極めたりとするも其領域は印度の一局部に限られ、之を表述する所以の言語又皆近似せり、故に後世の思想家の如く、「グリーン」を學び「ラテン」を習ひ、獨佛英の諸語を覺ぬ、而して後漸やく世界の諸思想を咀嚼するが如き困難あるなく、殆んど坐して以て之を吸収す可し、斯る早熟夙成の天才を以てして斯る多幸の時運に會す、所謂人時の和を得たる者なり。

されば常人の刻苦長年月を要する所の者、彼に於て殆んど抽手短日月を以て到得せるの觀ある、寧ろ自然の勢と見る可く、敢て其早成を驚くを要せざるなり、故に曰く、先づ論者の第一の個條とする所は實に不當の言なり。

次に論者の第二の個條とする所、即ち宇宙人生に關する眞面目なる大疑問に撞着し、痛絶なる大煩悶を惹起するは三

十歳前後にあり、十九歳は餘りに早熟なりてふ個條を見んか是れ只論者の一家言のみ、抽象論のみ、依て以て人事界の現象を律す可き原則と成すに足らず、井上博士釋迦牟尼傳中の實例に依て見るも、耶蘇の如き、弘法の如き、日蓮の如き「ルーラル」の如き、皆二十歳前後にして大疑問に撞着し、三十歳前後にして成道若くは一宗を創建せる者にして（勿論「ヤツ」弘法の如きは煩悶時代の何れの年なるや明瞭ならざるも其若年たるや疑ひなし）其他「ポーロ」の如き、「カルビン」の如き、「サボナローラ」の如き白隠の如き亦皆此部類に屬す可き者なり、是れ以て例外と成す可らざるのみならず、寧ろ東西宗教家の精髓は此種早熟者の中にありと云ふも過言にあらざるを覺ゆ、よし一步を譲るも、元來宗教家中には二十歳前後にして大疑問に撞着し三十歳前後に於て成道せる者と、三十歳前後にして大疑問を惹起して四十歳前後に於て一宗を創建せる者と、早晚の二種ありと云ふを以て正當の見地となす可し、是れ井上博士の實例が不言の中に實證する所なり、已に二種ありとせば、釋迦を以て單に早熟に過ぐるてム漠然たる宣告の下に之を晚成的部類の宗教家中に編入す可からざるや論無し。

然るに博士は飽く迄も自説を曲庇せられんとして、此等の實例を故意に不公平に列舉せられかるやの嫌ひあり、例へば孔子を擧ぐるや、故意に十有五而志學の一句を抹殺し、三十而立、四十而不惑とのみ記せられたるが如き、又二十歳前後にして大疑問を起し三十歳前後にして成道せる者をば、單に成道の年齢のみを明記し、疑惑時代の年齢をば知らぬ顔に抹

殺せられたるが如き、勿論中には年代の古くして不明なる者
あらんも、實際に於て明瞭なる者すらも之を省略せられたる
が如き、又早熟なる者は例令有名なるも之を暗中に葬り、晚
成なる者は例令有名ならざるも強ひて之を列擧して以て、偏
に晩成宗教家の頭数を多くせんと勉められたる跡あるが如き
博士の意は明かに自説を曲庇せんが爲めに、東西宗教家の實
例を駆使せる者なりと云ふも一言の辭無からん、故に博士の
説は博士の一家言抽象論にして、依て以て人事を律す可き普
遍的原理と見做す可からず、従て單に早熟に過々と云ふの故
を以て十九歳出家説を否定するの權威無し、故に曰く、第二
の論據は甚だ薄弱にして且つ不當なり。

而して二十九歳出家説を主張する學者の主なる論據とする
所は、以上の二點に於て盡くるを見る、既に此二個の論據に
して薄弱不當前述の如き者ありとせば、二十九歳出家説なる
者は未だ遂に信す可からざるなり、且つ夫れ二十九歳にして
出家せる者とせんか、釋迦の實跡に徴して甚だ矛盾着する
者あるを見るなり、乞ふ少しく之を論せん。

釋迦成道の後一度故都に歸りて其父王を訪ふ、時に其妃
「ヤスダラ」釋迦を見て愛慕の念に堪はず、牟尼の衣袂に引
きまつわりて且つ泣き且つ口説けり、凡て牟尼は神聖にして
冒す可らざる者、然るに女人「ヤスダラ」今其衣袂に觸れて
其神聖を冒せり、茲に於て父王、「ヤスダラ」が釋迦出離の
時に當り悲歎と追慕との中に其日を送れる可憐の状態を述べ
且つ「ヤスダラ」の爲めに辨じて曰く、

「汝が鬚髮を剃ると聞くや、彼女亦其頭を剃除し、汝が粗衣

を服すと聞くや、彼女亦粗衣を着し、汝が香飾を廢すと聞く
や、彼女亦香飾を棄て、汝の一定の時期に土器を用ひて食す
と聞くや、亦土器を以て食し、……他は王子が結婚せん
と欲するも皆之を拒絶し、之に告ぐるに汝に属するを以てせ
り、是れが爲めに今其疎忽を恕せよ」と。

若し虚心平氣にして之を讀過せば、彷彿として「ヤスダラ」
の聲容を想見す可し、即ち當時の「ヤスダラ」は双樓後十有
餘年の長年月を経過せる所謂世話女房の如き者にあらざして
新婚後幾何も無くして別離の運命に際會せる、孤棲の少婦た
るを想見す可し、釋迦の一舉手一投足悉く取て之を學び、依
て僅に其熱切なる愛慕の念を遣るが如きは、偶々以て其青春
の情燃ゆるが如く、抑々んとして抑ゆ可らず又人の手前を憚
るの餘裕をも有せざる、一徹なる小女氣質を表現する者に非
ずや、且つ夫れ他の王子が結婚せんと欲するも之を拒絶した
りと云ふより見るも、當時の「ヤスダラ」は媚媚花の如き小
女たりし事を想見す可し。

然るに普通に唱道せらるゝ所の説に依れば、釋迦の結婚年
齡は十六七歳なり、是れ素より早熟早婚の民族に在りては普
通の事にして敢て怪しむを要せず従て「ヤスダラ」の結婚年
齡は少くとも十四五歳なりしなる可し、而して若し釋迦の出
離を以て二十九歳の時なりとせば、當時の「ヤスダラ」は少
くとも二十七八歳の御婆さんにして、其子「ラゴラ」も亦
十歳に近き少年なりしに相違無し、(此事は後に詳述す可
し)既に二十七八歳と云へば、我が國の如きに在りても所謂
姥櫻の色香うすれたる時代にして、如何に才色双秀の婦人な

りとしてしかく諸方より結婚を申込み者無かるべし、況んや十
歳に近き少年の母たるに於ておや又況んや早婚印度の如きに
於てや、誰か之を所望する者ぞ。

是れ明かに釋迦出離當時の「ヤスダラ」は未だ杏桃の期を
經過する事大ならざる一小婦たりし事を證して餘りある者、
既に「ヤスダラ」にして二十歳前後の一小婦たりしとせば、
釋迦が二十九歳にして出家せりと云ふは事實に於て有り得可
らざる所、寧ろ十九歳にして出家せりと云ふの事實に綜合す
る者あるを見る、是れ矛盾の一。

『又釋迦故都に歸りてより七日を経たるの時、「ヤスダラ」
其子「ラゴラ」と共に高樓の上であり、之に語りて曰く
子たる者は方に父の財産を受く可しと「ラゴラ」答へて
曰く、余は淨飯王(ラゴラの祖父)の外に父あるを知ら
ず誰れをか我父となすやと、「ヤスダラ」即ち意より宮中
に入り來る釋迦を指して曰く、汝彼の沙門を見るや、彼は
汝の父なり、汝往きて父の餘財を求む可し、……』と云
ふ事あり。

之に依て之を見るに、「ラゴラ」は全く祖父淨飯王を以
て己が父なりと信せる事明かなり、已に祖父を以て父なりと
信するより見れば、其父釋迦なる者の此世に存在する事を知
らざりしや言を待たず、已に釋迦て父の存在する事を知ら
ずとせば、「ラゴラ」の釋迦に別れたる時は父の顔を辨
別せざる程の幼時なりと斷定せざるを得ず、即ち母の胎内に
あるの時若くは嬰兒たるの時なりと斷定せざるを得ず、而して
若し釋迦の出家が二十九歳の時なりと云ふを以て眞に近しと

せば、其子「ラゴラ」の出生は實に結婚後十有餘年の長
日月を経過せる後にありとせざる可からず、是れ普通の考を
以てするも多くあり得可からざるの所にして、多くの場合に
ついて之を見るに、大抵結婚後二三年にして一子をあぐるを
常とし、遅くも四五年を出でず、十有餘年にして始めて第一
子をあぐるが如きは極めて稀有の事に屬す、是れ所謂事實に
遠き事なり、且つ又十九歳出家の由を説ける經典中には、皆
當時已に「ラゴラ」の出生せる事を報ずるに於て一致せり、
故に之を世上一般の實例に徴するも亦此經典の所説に徴する
も、釋迦十九歳にして已に其子「ラゴラ」を擧げたる事
は信す可きに近しと云ふべし、少くとも釋迦が二十九歳の頃
始めて一子を擧げたりとするよりも、十九歳の頃始めて一子
を擧げたりとするを以てより多く事實に近しと云ふ可し、故
に若し釋迦にして二十九歳の時に出家せりとせば、其子
「ラゴラ」當時已に十歳前後の少年なりしなり、何んぞ五
六年の間其父を見ざるも父の顔を忘るゝ事あらんや、よし父
の顔を忘るゝ事ありとするも、父なる者の存在せし事を忘る
ゝ事あらんや、況んや父の存在を忘却すると同時に、祖父を
以て父と呼び父と思ひ父と信するに至るを得んや、而も約十
年の間祖父と呼び祖父と思ひ祖父と信したる所の祖父を以て
俄然として之を父と呼び父と思ひ父と信するに至るを得んや
是れ決して有り得可からざるの事なり、故に「ラゴラ」が
父を知らずして祖父を以て父と信したるは、亦以て釋迦の出
家が二十九歳の時に非ざるを證する者、是れ矛盾の二なり。
余は此二個の理由に依て釋迦二十九歳出家説なる者の全く

事實に近からざる者なるを断言せんとす、余は又此二個の理由に依て寧ろ釋迦の出家が十九歳たる可くして二十九歳たるべからざるを主張せんとす。

余は更に一步を進め釋迦出離の動機について少しく忖度する所あらん乎、素より是れ忖度なり、揣摩なり、憶測なり、所謂當るも八封當らぬも八封なり、殊に釋迦の如き不世生の大人物の心中を忖度するが如きは、甚だ其分に過ぎたる者なるを恐ると雖も、釋迦も亦是れ同じく人間たる以上は、吾人と共通なる人間らしき心情を有せるや論無し、されば余は此人間らしき普遍的性情の脈絡をたどり、依て以て釋迦出離の動機が奈邊に存するやを探究せんと欲す。

釋迦は生來甚だ悲觀的の人物なり、涙脆き人物なり、情に厚き人物なり、花の凋むに泣き、月の欠くるを悲むの人なり故に父王大に此頃向を憂へ、有らん限りの方法手段を盡くして以て、釋迦の悲觀的傾向を鎮へさんとせり、されどあらゆる方法手段は終に無効なりき、少年釋迦嘗て父王に乞ふて城内市民生活の狀を觀る、時に道にして老者に遇ひ、病者に遇ひ、死者に遇ふ、茲に於て益々人生の無常を悲しみ、生、老、病、死の四苦を恐れ、出離得道の願心愈々固し、故に人生の無常を悲み、生、老、病、死を解脱せんと欲するの念は、殆んど釋迦の先天的性情に胚胎する者と見做す可く、釋迦をして出離を敢てせしめたるの大動機は本より此處にあり。斯く、彼は人生の無常なるを悲しみ、四苦の恐る可きを感ずると同時に、一切の民衆鈍感にして身自ら此恐る可き火宅にあるを知らず、役々營々として生死海中に流轉するを憐み、

「ラ」なる女あり、芳紀將に三五、清麗の風姿花よりも美なり太子一度び之を見て愛慕の念に堪はず、衣片を以て之に附し依て其情を表す、斯くて相思の人は双棲の身となれり、其喜び思ふ可し。

されど歡樂極まつて哀情多く、相思の人は悲しみ易し、相思の念愈々密なると共に人生の無常を感ずるや愈々痛切なり纏綿の思ひ益々つのる所、生死の恐苦を感ずるや前日に百倍せん、綠葉永へに清風を送り、百花時を追ふて開き、奇禽靈鳥其間に飛舞囀唱するも、世は永への春ならざるを如何せん人に百歳の壽無さを如何せん、凡そ人の最も時の短きを歎するは其最も愉快なる時にあり、相思纏綿の情は實に釋迦をして益々人生の無常を感せしめ四苦の解脱に向て急奔せしめし所以の刺戟なり。

且つ情人の相對するや一種知己の感を以てす、あらず其熱情更に之に優る者あり、古人歌うて曰く、人生意氣に感ず、功名誰れか又論せんと、櫻花の美なるも蓋蓋の馨なるも、何んぞ人生意氣に感ずるの美且つ馨なるに若かん、諸葛亮が思を魚がし心を苦しめて漢室の再興を計りし所以の者、真田幸村が孤壘頼るべし無き大阪城を助け、關東の大軍を惱ませし所以の者、皆是れ知己の思に感激せるが爲めなり、知己の思に感ずるの利那は人心の最純最粹なる者なり、歎はり多き人の心も此時のみは確かに眞實なり、汚れ多き人の心も此時のみ確かに無我の淨境に遊ぶなり、此時に當ては人心只知己の爲めてふ一念に依て支配せらる、水火踐む可く鐵石亦穿つ可し、人生知己に感

四苦を解脱し衆生を濟度せんと欲するの念漸やく固し、されど如何に聰明なるも如何に叡智なるも、所謂世間見ずの懷子なり、生れて一度宮城の外に出て、僅に民衆生活の實狀を見、老者を見、病者を見、死者を見て、驚天せる程の世間見ずなり、已に民衆の實狀を知らずんば所謂衆生濟度なる者も亦只漠然たる抽象的觀念のみ、然り抽象的觀念なり、然れども未だ釋迦を驅て出離の大事を執行せしむるに足らざるなり凡そ人は何事に依らず、單に抽象的觀念のみに依て動く者にあらず、抽象的觀念にして層一層痛切に感せしむる外部的刺戟の來るあり、此處に於て人始めて動くなり、「ルーテル」年少にして遁世求道の志あり、されど決然として之を執行せるは實に其友の電死を眼前に見たるに依る、西行亦始めより遁世の志あり、而も終に之を斷行するに至りし所以の者は、其親友の頓死に依て激せられたればなり。

然らば釋迦と雖も同じく人なり、單に四苦解脱衆生濟度と云ふが如き漠然たる抽象的觀念に依て動かさる可き者にあらず、其動くや必ず四苦の解脱、衆生の濟度なる者の必要を一層痛切に感せしむる處の外部的刺戟なかる可からざるや明かなり、余を以て之を見れば、釋迦と「ヤスダラ」との結婚は實に此外部的刺戟として來りし者なり。

釋迦年漸やく十六歳、其悲觀的傾向益々甚だしく、鬱憂樂まさるの情愈々つのる者あるを見て、父王憂心禁せず終に大臣等と謀りて其妃を迎へしめ、戀愛の甘夢に依て此鬱憂を散せしめんとせり、茲に於てか日を期して貴族の子女を一堂に集め、太子をして親ら其欲する所を撰ばしむ、中に「ヤスタ

ずるの意氣何んぞ麗にして馨なるや。

而も他面よりして之を見る、一人の知己を得るは或る意味に於て一個の重荷を加ふる所以、一人の知己を増すは一倍自己を束縛する所以なり。

今夫れ釋迦は一人の愛人を得たり、一人の知己を得たり、自己自身よりも愛す可き他の自己を得たり、彼が生老病死の四大苦痛四大怨敵に對するの感や如何、今迄は只是れ自己を滅すの怨敵なりき、漠然たる衆生て集合名詞を亡ぼすの怨敵なりき、然るに今や即ち然らず、自己一身の怨敵たるのみならず、衆生て集合名詞の怨敵たるのみならず、實に其愛人の怨敵たり、其知己の怨敵たり、自己自身よりも愛す可き他の自己の怨敵たるを發見せり、其痛苦果して如何、是に至て「ヤスダラ」の温情は却て彼が胸を貫くの利劍なり。

加ふるに情人を得るは世界を知るの初めなり、眞個の他愛は戀愛の後に來る、今や彼は情人を得たり、世に自己よりも愛す可き他の者あるを知れり、世間見ずなる彼も亦衆生の何者たる世界の何者たるやを解し始めたり、衆生て集合名詞は俄然として實物と變せり活物と變せり、憐む可きのみならず愛す可き者と變せり、換言すれば愛人「ヤスダラ」は衆生の代表者として現はれ來れるなり、嗚呼四大怨敵は滅せざる可からざるなり、自己の爲めに滅せざる可からざるのみならず、衆生て集合名詞の爲めに滅せざる可からざるのみならず、實に身にも代へ難き愛人知己の爲めに滅せざる可からずあらず、愛人の背後に隠れたる血あり涙あり息あり汗ある生ける衆生の爲めに滅せざる可からず、今や彼は二人の苦痛を

一身に擔うて起てり、あらず萬民の苦痛を一身に擔うて起てり、一人の苦痛は猶ほ忍ぶ可し、二人の苦痛は忍ぶ可からず、況んや千萬人の苦痛をや、今や彼は苦痛の重荷に堪えざるを感じぬ、是に於て彼は決然袖を拂ふて起てり、父王を棄て、故都を棄て、愛人を棄て、愛子を棄て、萬民共通の四大怨敵に向て一大鐵斧を下す可く決然袖を拂ふて起てり。

壽量品

憲 洪

鷲の山月を入りぬと見る人はくらきに迷ふ心なりけり、

西行法師

然り蒼々たる萬里の空、晴光一點の騎なき鷲峯の明月、鬱葱たる西山の森に入り、世は芒乎として黑白もわかぬ眞の暗、迷々迷々

金風飄たる三千年往昔の兎魄、江樓、鴈を飛ばす今年の嫦娥、豈夫れ孰れか異なるあらんや、月は限り無き三世に依然玲瓏として、無量の光りを垂れて、下界を照らしつゝ、在る也、月の入りぬと見しは一時的にして、永久の入りぬるに非らざる可し、月其ものにしては入りしに非らざる也、月は入りぬるに非らずして入りぬと現せし也、是れ非入現入と稱す可き乎

衆生を度せんが爲めの故に方便して涅槃を現す而も實には滅度せず常に此に住して法を説く(經)
常に此に在て滅せず方便力を以ての故に滅不滅有りと現す(經)
誰かはこの文を拜讀し、釋然として感し、翻然として覺めざるものやある、佛の生滅は、月の出て、また入りぬるが如く也、是れを非生現生非滅現滅とは云ふ也、佛は無量の壽命と無限の智慧とを有し給ひ、輒乎として廣大なる慈悲を無限に垂れ賜ふ也、

慧光照すこと無量にして壽命無數切なり(經)

無量と云ひ無數と説き給ふは、皆是れ其限り無さを示し給ふに非らずや、開々たる最上至極の大智慧その光りは、小乗となり、大乘となり、方便となり、眞實となり、折空觀を説き、体空觀を説き、隔歷三諦を説き、圓融三諦を説き、未開の圓を示し、開顯の圓を示し、理圓を示し、事圓を示し、宇宙のあらゆる萬法を説き示し給ひたる也、

支那の楚の南に冥靈と云へる者あり、五百歳を以て春となし五百歳を以て秋と爲す、上古に大椿と云ふ者あり、八千歳を以て春となし、八千歳を以て秋となす、堯帝の世に彭祖と云ふ者あり、夏を歷般を經、周に至りて、年八百歳なり、東方朔と云へる者は、九千年なりしと云ふ、此等の如きは、壽命無數切の釋迦牟尼佛に對しては、尙ほ天者と云はざるを得ず

月は出るにあらずして出ると現せし也、是れ非出現出と稱す可き乎、
大聖釋迦牟尼佛は、皇紀一〇四年の頃、中印度迦毘羅城に生を現し給ひ、幼名を悉達太子と號しき、十九歳にして出家し給ひ、三十歳にして阿耨多羅三藐三菩提を得給へり、それより、華嚴阿含方等般若法華涅槃の五時に於て、頓漸不定秘密の化儀、藏通別圓の四教を説き給ふ、會を重ねると三百、年を経ること五十年、大藏經七千卷の經典は即ち是れ也、七十九歳にして拘尸那城外戸縣拏伐底河の西岸、令月影臘なる夕、娑羅樹の下に滅を現し給ひし也
暗闇?暗闇?

佛弟子は、慈悲厚き父母に捨てられたるが如く、闇の夜に燈の光りを失ひたるが如く、悲と迷とは交々彼等の胸中を往來せしならんか、
王舍城の竹林精舎、五六里の西南、毘訶羅山の七葉樹窟に於て、摩訶迦葉長となり、阿難優婆塞等の五百の大阿羅漢を集め、經律論の三藏を結集す、是れを上座部と云ふ、窟外數千人衆部の結集あり、終に第四回の結集をも開くに至りぬ、幾千の大阿羅漢と菩薩とは、小釋迦牟尼佛にてありし乎、其結集せる經典は佛教各宗の依經となり、罪の病に彷彿ひつゝ、くらきに迷ふ暗の夜に、多くの有情を照すなる、大燈明となりし也、

佛は、久遠、中間、過去、現在、未來、三世常住、壽命無數切なり、あゝ、時間的無限の生命を有し給ふは、大聖釋迦牟尼佛也
磨ぎ澄ました様な一輪の明月、清空に輾り、光り煌々として宇宙を照らし、國家を照らし、社會を照らし、政治家を照らし、農家を照らし、商家を照らし、工家を照らし、醫家を照らし、或は、富貴の家を照らし、貧賤の家を照らす、一度この明月に曬けば、釋然として何ものをか悟り得しこゝちする也、
悟り得し心の月のあらはれて鷲の高根にすむる有りける
西行法師

誠意の解釋

湯本武比古

誠意と云ふはどう云ふものである、或は誠意と云ふものと品性と云ふものは、どう云ふ關係のものである、或は誠意と云ふものは、善惡の行爲に付いて、之を判定する所の標準にするものであると云ふやうな、色々誠意に關係したことに付いての御話を、ザツと一通り致しまして且つ吾々教育者は誠意の人間を培へると云ふことが、究竟の目的であるからして、

誠意の人物を拵へるにはどうしたか宜からうと云ふことに付いて、御話を致したいと思ふのでございませうが、併し其之を拵へる方法に至りますと云ふと大層長くなりますから、其方法のこと又は止すことに致しまして、それに至ります迄のこととをば、大略御話をしやうと考へて居りますのでございませう。誠意と云ふものはどう云ふものであるかと申しますと、是は皆様御承知の通りに大學に誠意正心修身齊家治國平天下とありまして、大學の一番始めにあります文字でございませう。欲修其身者先正其心、欲正其心者先誠其意、欲誠其意者先致其知、其致知在格物と云ふやうに、大學の開巻にあります所の言葉であります、即ち其誠意と云ふものは、其心を正ふし又身を修むる所の根原であると云ふこととあります。然らば其誠意と云ふものは、どう云ふものであるかと申しますと云ふと、大學の傳の方に、所謂誠其意者毋自欺也、是丈の解釋がある、自から欺くことのないものが、即ち是誠意である、其の自から欺くと云ふことはどう云ふことであるかと云ひますと、之は朱子の註に自から欺くと云ふことは善のなすべく、惡の避くべきを知つて、而も心の發する所、未だ實ならざるを云ふなり、即ち善は爲すべし、惡は避くべしと云ふことを知りつゝも、心の發する所、換言すれば、意思が其の知つたことに伴はないのが、即ち自から欺くのであると云ふ解釋でありますから誠意と申しますものは、自から欺かないこと、

言葉を換へて申しますと、善の爲すべきことを知つて之れを爲し、惡の避くべきことを知つて之を避ると云ふことが即ち誠意である、是は大學に在ります所諸君も御承知の解釋でございませう。西洋に於きましても誠意と云ふことがある、即ち獨逸語で云ひますと「ゲウイッセンハフテヒカイト」と云ふのが即ち此誠意である、誠意即ち此「ゲウイッセンハフテヒカイト」と云ふことはどういふ意味であるかと申しますと内界法院の意識、大層六ヶ敷言葉でございませう、カントの言葉でございませう、内界法院（外界の法院即ち地方裁判所なり區裁判所なり、大審院なり、或は控訴院なりに對して）の誠意換言すれば良心でございませう、此良心と行爲即ち意志が一致することを稱して「ゲウイッセンハフテヒカイト」即ち誠意と云ふと申してあります。所て尙は教育者諸君の能く御承知の通りヘルバルトは五道念即ち五箇の道德理念を提唱したヘルバルトの倫理學に於ける特色である。其ヘルバルト倫理の特色の五道念の第一が即ち内心自由の理念であるが、是即ち所謂「ゲウイッセンハフテヒカイト」即ち誠意である。其ヘルバルトの内心の説明が唯今申しました、カントの言葉の通り内界法院の意識に、意思が一致するのである、唯ヘルバルトは言葉を換へて立法的意思に、實行的意思が一致すると云ふ

て居る、即ち立法的意思に實行的意思が一致するのを稱して之を内心自由とヘルバルトが稱して居る、此内心自由即ち誠意と云ふものを、西洋の或る學者は、道義の模範概念と申して居る、即ち倫理道德の模範概念、是れ最高の倫理概念であると云ふことを申して居る。併ヘルバルトに従つて説きましますと、内心自由即ち誠意は二ツの性質の異つた意思、即ち立法的意思に實行的意思が一致する、言葉を換へて云ひますれば、良心の命する儘に、吾々の意思が働く、吾々の行爲と云ふものが、良心の命する所に背かぬと云ふことが詰り、ヘルバルトの云ふ内心自由即ち誠意である。でありますから誠意と云ふもの、解説に至つては東西全く同一であると思ひます。誠意と申しますことは唯今申しました通り、其意を誠にするると云ひ、又其意に誠なりとも讀みまして、兎に角良心の命する所に吾々の行爲が一致することである。而してヘルバルトが之を内心自由と命じた故は何かと申しますと、即ち良心に吾々の行爲が一致して居る、良心の命する儘に吾々が意思し行爲致します時には、内に顧みて疚しい所がない、即ち心に耻する所がない、全く我心と云ふものが所謂人欲の私に奴隷とされず、或は束縛されて居ることがない、是がヘルバルトの申した内心の自由と云ふもので、道德上に於て最も大切なものである、併之を内心の自由と唱へた所以は、外界の自由或は政治上の自由に對してある此外界の自由と内心自由とは、

大さう趣が違つて居る、政治上の自由即ち外へ現れた所の自由は、主として物質的自由とか、思想發表の自由とか種々な自由をいふものであります、此等自由を主張し、之を非常に尊重する人でも、内心の自由を得ずして、所謂人慾の奴隷となつて居るものが澤山ある、大層盛に外界の自由を唱へるけれども、自分は自分の慾を制することが出来ぬで、誠に巧いことを致して、さうして自分の慾を遂げると云ふやうなことがある、之は外觀の自由は得て居るものであるか知りませぬけれども、さう云ふ人は、即ち内心の自由を得ないで人慾の束縛を受け、其奴隷となつて居るのである、内心の自由を得たと云ふ、即ち誠意の人と云ふものは、先刻申しました通り、内に顧みて疚しい所なく、心に耻する所がない、人慾の束縛を脱し、其奴隷でない、所から大學に云ひます所の、此之謂自謙故君子必慎其獨也、即獨りを慎むものでなければ、自から謙しと云ふことがなく、内に顧みて疚しいことがないと云ふことを得ない。であるから、結局するに獨りを慎むことが身を修むる秘訣と申して、決して差支ない、即ち朱子も所謂誠意は、自から修むるの始なりと云て居るのと思ふのです。誠意と云ふものは先づ支那に於て云ふ所のものでも西洋に於て云ふ所のものでも、其實に於て違はない、大略唯今申しましたやうなことであります。併此誠意と云ふものと、教育者が常に云ふ所の品性とは、

う云ふ關係のものであるかと云ふことを申しますと、御承知の通りには、品性と云ふものは、是は心理學上の意思の状態である。従つて品性と云ふものには、善なる品性も悪なる品性もある、高尚なる品性のものも、品性の下劣なものもある品性は意思の一の形である以上は、無論意思の形の悪いもの或は善いものがある道理である、即ち品性と云ふものには上下様々の品性があると云ふことは明である、所で誠意と申しますものは、心理學で云ふ所の品性の善なるもの、心理學で云ひますと、道義的品性が即ち倫理學に於ける誠意であると申して宜しいのである、即ち誠意と云ふものと、品性と云ふものとは、さう云ふ關係である。品性を陶冶すると申しますれば、無論道義的品性を陶冶する、即ち誠意と云ふものを、吾々が兒童に養成するのである。唯單に品性と申しますと、品性は一種の意思の形でありますから、其中に善悪様々ありますが、道義的品性と申しまして、其道義的品性を陶冶するといふとは、吾々教育者の最終の目的の如くに心得て、今日孜孜と務めて居る、即ち誠意の養成涵養を務めて居る、即ち善なる意見を與へ、言葉を換へて云ひますれば、良心を啓沃して、其命ずる儘に働く所の意思を強めんことを務めて居るのである、併し朱子學者の中に於きましても、誠意と云ふものに付いて、疑を挾んだものがある。是は朱子の語録にありますが、意に誠があると云ふたからとて、必ずしも善てはあ

まい、何故なれば意には悪なるものもあるからと云ふことを朱子に質問したものがあつた。是は今日て申すと誠意と品性とを混同したから起つた質問である、意に誠であると云つても、其意には善いものもあり、悪いものもある、其中で悪いものに誠であれば、是は決して道徳上譽むべきものでないから、何故誠意は善であるかといふ質問である。次に誠意と云ふものは善悪——善行悪意と云ふものを判別する所の最も重要な標準であるとを話します、借道徳的智識の異なるに従つて、其誠意に出る所の行爲も勿論等差があります、道徳的意識即ち良心の發達の模様によりまして、其誠意に出た行爲でも、自から違ひがある、是は時に依つて違ひ、所に依つて違ひの一例を取つて申しますと、昔は君父の仇は、俱に天を戴くべからず、自分の父たり君たる者が他の人に殺された時には、其臣たり子たる所のものは、木の根草の根を分けても、必ず自から其敵たるものに刃を挾むのが、其本分であると解釋した。其時代に於きましては、さう云ふ行爲の人は、實に孝子たり忠臣たるものである、何せと云ふに、それをするのが即ち臣子たるもの、本分であると、斯う心得て居る。即ち其道徳的智識に一致した行爲をしたものは、是實に其當時に於て、最も忠臣若くは孝子として、譽むべき人間であつた。併し今日になつてはさうであるか、今日になりますと云ふと或は自分の主人たり、或は父たるものが

他の人に殺された所で、それを自から身を擡て、昔の仇討のやうなことをするのは悪いと云ふことになつて居る。さう云ふ場合には國家が其刑罰を行ふべきもので、其子や家來に仇を討つことを許さぬ。だから、今日道徳上に於ても、さう云ふことをするのは宜くない仇討をするのは宜くないと云ふことになつて居るからして、それをするのが却つて忠臣たり孝子たることを傷けるのである。であるから、茲に一人あつて親の仇を自分で討つたとすれば、是が昔であれば孝子であると譽められるけれども、今日であると譽められぬ。何故といふと今日では、さう云ふことはするものでないと云ふやうに、法律でも定められ、又社會一般の常識も、さう云ふことになつて居る、又其人も之を心得て居る筈であるのに、只々感情上から、仇を自分で討つたのであるから、昔の人が親の仇を討つたものを、孝子と譽めたやうに今日では之を譽めないのみならず、却つて誹られるのである、即ち同じき行爲であるけれども、古今時世を異にするに隨つて判断が違つて来る、其判断をする標準は、何であるか即ち誠意である。昔の人は斯うなくてはならぬと云ふ所から親の仇を討つたのだから其仇討が誠意に出た行爲で、道徳上善である。今日はさう云ふことをしては、却ていかぬと云ふことを知つて居つて、然も之をしたのであるから、同じく親の仇を討つたのであるけれども、不誠意に出た行爲で、道徳上之を譽めること

は出来ないものである。又吾々極く幼少の時分には、攘夷といふことが行はれて外人を斬りてもするものが、尊王、愛國家として尊重された、其時分には之でなければ國家は危い、即ち國家の爲め君の爲め、外國人をば追拂はねばならぬと云ふことを、實に臣民たる者は、心底から考へたのである。今日から考へれば、實に愚の至りであるが、さりとて當時の攘夷家を、今日の考へからして、非忠君愛國者と貶すべきものでない、否當時に於ける忠君愛國者として尊敬せねばならぬ。併し今日に於て、それと同じ行爲をしたらどうか、今日は當時とは道徳上の思想が違つて來て居る、それにも拘らずさう云ふとすれば、これ一種の「フアナチック」即ち感情、情狂の行爲であつて、尊敬するどころではない、道徳上の大罪人とされるのである、其の然る所以は又實に誠意と不誠意とによるからである。凡そ人の行爲は誠意に出でたるか否かによつて、其善悪を判することが出来る今日に於て爲せば誇られる事柄でも、是が昔の時代に於ては、當時の道徳的行爲であることがあつた、今日から昔の人の行爲を評するに、今日の道徳上の知識を以て判断したならば非難することが多々である。であるから之は大變間違つて居る、教授材料などに於きましても往々斯かる間違つた考へから、選擇されるやうなこともあるが、之は吾々が甚だ遺憾であると思ふ、其時代に於て極く忠臣孝子として尊重されたのを、今日の知識から見ても、あ

云ふ者は忠臣孝子でないといつて評するものもあるが、併し其當時に於ては忠臣孝子であつたに違ひない。であるから誠意と云ふものを標準にせずして判断すると此類の酷評が出来るのであらうと思ひます。以上は古今時の違ひに於ての話であります。場所の違ひに於ても亦其通りである、同じ事柄でも、西洋人がしては、大變立派な道徳的行爲を爲したと云つて譽められることでも、其事柄が、日本人に於てされること、一向下らぬ行爲だとされるのみならず、却つて誇られる事もある。併し西洋人は斯くすべきものと心得てしたのであれば、其西洋人に就いては、實に善いこととして、吾等日本人でも又之を賞せねばならぬ。即ち西洋で其事をした人は西洋の道徳的知識に、其意思が一致する所謂誠意で爲したのであるからである。けれども、其道徳的知識の違つて居る日本に於て、それと同じことをしても、それは譽められないのみならず、場合によりては大不道徳となることもある、又全く違つた事柄でも、同じく兩方誠意でやつたなら一樣に道徳的行爲を爲した人と云つて賞せられることが出来る。(未完)



岡山通信

拜啓昨今は何となく秋色を呈し申候、其折柄統一編輯局各位愈々御健勝の段爲國法奉大賀候我が篤信會に於ては去月廿一日山崎町本行寺に大演說會を開催致し候聽衆二百餘名にして當日の辨士及び演題は左の如くにて候

- 開會の辭 中川 事 顯
- 噫世の利己心病者 山本 容 廣
- 唯一の教主 能 仁 事 一
- 宗教と倫理の調整 能 仁 事 一

各辨士は順次登壇の上獨特の雄辯を以て其主旨を堂々鼓吹せられ無事閉會を告げしは十時過ぎにて候尚九月十六日午後八時より本行寺に同じく大演說會を開催致し申候中國山陽兩新聞への廣告其他各準備を整頓し大々的の布教を試み申候十時頃には殆んど立錫の餘地なきまでの聽衆なれしが其過半を學生其他有望の青年男女を以て滿されたるは何より喜ばしき事にて候故に當夜は各辨士とも極めて熱心に廣長舌を振られ申候其辨士と及び演題は左の如くにて候

- 開會の辭 吉岡 佐 源 次
- 統一觀 山本 容 廣
- 信仰の力 能 仁 事 一

今後に處する國民の覺悟殊に能仁上人は右の演題に基き先づ日露戰爭の起因より説き起され其今日に至れる間數十百度の激戦に皇軍が全勝の理由を説明され最後に此度の媾和問題に就て我忠君愛國なる臣民が取るべき主義及び方針を論じ進んで今後に處する國民の覺悟を詳細に演述され或は經文祖判を引證して本化的見地より

時局に對する大覺悟を殆んど二時間に亘る間極めて快活なる辨を以て遺憾なく講話せられ申候多くの聽衆皆耳を傾けて其高説を諦聽し堂内寂として又人なきが如き觀有之候以て其聽者の熱心の程察するに餘りあり候、師は拍手喝采の聲裡に降壇され目出度散會を告げしは十一時過ぎ近來稀なる盛會にて候

▲佛教清話會 當市師範學校生徒八十餘名は毎月二回能仁上人を同校講堂に聘し佛教の講話を熱心に聽聞し尙學問に妨げなき限りに於ては大に佛教を研究し殊に聖日蓮が教風を愛慕せる由なるが聞く所によれば中學生も二十餘名加入の申込ありたりと何は兎もあれ時局の發展にもなほ我宗門の發展又かくの如くに候正法發揚の時機これ正に今日にて候御隨喜被下度候委しき事は後便を以て御報申上べく候不誼

▲津山通信(鶴山外史) 先師第一義院日容上人の化跡たるわが津山町は、今春來弘通所主教山名木信師の上京と、本蓮寺主山本容廣師の和氣本成寺へ榮轉後、暫く教界寂寥の感ありしが、幸に岡山能仁師並に先住山本師の紹介に依りて、堺市妙滿寺の梶木日種師を本蓮寺に迎へ、同時に本蓮寺弘通所合同するととなり、先月彼岸に梶木師の晋山あり、その際和氣より山本師來錫せられて寺務引繼を兼ね、盛なる晋山式を擧げられたり、又本月十日は舊九月十二日にて例年の通り本蓮寺に於て龍口法難會を執行せらる、その概況を記せば、當日午後八時より修法あり、次で演說會を開かれ各自熱心に演述せらる、即ち

- 開會の辭 寺主 梶木 日 種 師
- 信教者の心得 上田 竹次郎 君
- 顛倒の衆生 玉置 圓次郎 君
- 信仰上の所感 山本 近 女 史
- 龍口法難の緣由 梶木 日 種 師
- 右終て安藤成績君 山本近女史の吉備樂(立渡るの宗歌、君

管長認可

日蓮宗管長久保田師病氣に付退職し山梨縣久遠寺住職大僧正豐永日良師を以て後任管長に定めたま旨願出て本日四日内務省之を認可せり

▲内務大臣の訓令 平和克復に付神佛各宗管長に對し左の訓令を發せられたり

日露の戦局終りを告げ發に盛運なる聖詔を奉拜するに至れり願ければ交戦二十閱月連戦連勝に克く制戦の目的を達し、東洋治安の空圖を確立せられたるもの業より至聖の御機成の然らしむる所なりと雖も、教宗派管長が時局に處して能く其職責を盡し部下教師を督勵し各々其任務に從ひ奉公の誠を致さしめたるの功亦併しとせず今や國家の光榮新に加はり國民の責任一層の重きを見る布教に従事する者宜しく國運の趨勢に鑑み民情を調攝し風俗を提擧し以て

聖旨に奉答する所なるべからず特に國憲の聖旨を服膺し人をして信教自由
に關する危懼の念を絶つしむる如きは布政使を以て其任を爲す者の最も深
く意を致さるべからざる所とす官長たる者宜しく此意を體下部下の教師を
指揮誘接し以て其本分を完するを期せしむべし
明治三十八年十月十六日
内務大臣 男爵 清 浦 奎 吉

▲梵語字典 今般哲學館大學に於て講義録中より左の一書別
刊に附し豫約を以て出版の由
希代梵語字典 本書精易土集
古德慧晃阿闍梨編

▲大南門より小西門に至る内廓外に沿ふて、道幅九尺の兩側
二十丁餘は、天幕を張れる店、板一枚の露店、石、瓦の上に
各商品を陳列して客を迎ふるの狀甚だ騒然たるものである、
而かも人の往復肩を摩して臭氣鼻を衝き、潔癖なる日本人は
惡感眩暈せざるを得ない、易者あり、呉服店あり、小間物店
あり、飲食店あり、古着屋あり、ボロ靴屋あり、金物店あり
日本の所謂ツヘモン語りあり、手品使あり、此の手品使能く
奇々妙々の術を爲し幾千の觀客起つて靜かに怪術に感ずるも
の、如きあり、老婆の十數名は地上に踞坐して衰れを請ふあ
り、賣藥店あり、店頭には金療治病と記せる十數個の藥袋
及び針十數本を列べて其効能を言ふあり、予は特に此の針の
用法を問ひしに、彼れの答ふるには病者の患部又は腫物に藥

▲奉天城巡りの記 續、在奉天 三上義徹
▲大南門より小西門に至る内廓外に沿ふて、道幅九尺の兩側
二十丁餘は、天幕を張れる店、板一枚の露店、石、瓦の上に
各商品を陳列して客を迎ふるの狀甚だ騒然たるものである、
而かも人の往復肩を摩して臭氣鼻を衝き、潔癖なる日本人は
惡感眩暈せざるを得ない、易者あり、呉服店あり、小間物店
あり、飲食店あり、古着屋あり、ボロ靴屋あり、金物店あり
日本の所謂ツヘモン語りあり、手品使あり、此の手品使能く
奇々妙々の術を爲し幾千の觀客起つて靜かに怪術に感ずるも
の、如きあり、老婆の十數名は地上に踞坐して衰れを請ふあ
り、賣藥店あり、店頭には金療治病と記せる十數個の藥袋
及び針十數本を列べて其効能を言ふあり、予は特に此の針の
用法を問ひしに、彼れの答ふるには病者の患部又は腫物に藥

品を注ぐに供すと、而れども其針は日本の縫針に等しく、而
して銷多く衣服縫用にすら用ゆるを得ざるなるも、彼等は敢
て悟らず怪まらず慢然之を醫術上の外科器として使用するに至
ては危険も亦甚だしと云ふべきである、露店に於て尤も予の
注目を惹きし事は寒煙草の一本賣である、我國の如きは如何
なる下層者と雖一本の巻煙草を買ふものなく、少なくとも一
個を購はざるものはない、而るに清國の一本買は苦力労働者
のみに非ずして市街商店の主人番頭に於て反て多數なるを認
むるのである、斯くして清人は貯蓄に努めつゝ居るのである
▲城内に於ける東塔寺の喇嘛塔幾十丈の高く雲際迄立せる
は淺草の淺雲閣を觀るの思がある、是れ勅建皇寺の執務寺院
にして周圍五丁餘煉瓦にて圍まれ、極めて莊嚴の美ありと言
ふも日本歩哨起つて漫りに參觀を許されぬ、大層なる聯
▲醫院、小藥掃開千里雲、神針點散一天雲など、大層なる聯
牌を懸けて居る、此の醫生は所謂漢方醫にして生理醫學上の
智識及び實驗なく、患者の來るあらば内用散藥を與ふるのみ
にして水藥の調合は爲さぬ、而して其藥品は草根木皮の製藥に
數は病症に對して精神上防ぐ可らざる天災の如く信じて之が
豫防法を講じない、故に病魔の荒れ廻る儘に放任して全く無
頼着法を講じない、文明人ならざる清人の頭腦には衛生上に關する
考察力絶無である、されば日本の清心丹寶丹を最上良藥とし
て居るの狀態である、
▲滿洲に於ける家屋の建造は二階建なく悉く平房である、市街
は稍々佳なるも、土人の如きは皆周圍土壁を塗りて一家屋を
作るの、全く換氣法の設備なく新鮮なる空氣の交換せざる
は蓋し其結果にして、從て陰雨霖々として數日開かざるあれ
ば忽ち水沓に浸して屋内を浸し濕潤極まるの室に變ずるの
慘狀を招致する衛生上の害甚だしく亦傳染病流行病の發生
意なく全く平然たるものである、然るに清人は之に對して何等の留
皮の藥品に依りて之を防ぎ之を治せんとするは殆んど木に線
ありて魚を求むるの類である、
▲あ、教學の道開けざる清國に棲息する人民の哀れさよ、

高等金物類
家庭金物類
陳列所備附

濱松屋

田島義三郎

電話番町六百二十一番

牛込區赤城元町

佛教雜誌 活版石版印刷
其他各種 京橋區中橋大鋸町十四番地

各宗御用 北澤活版所

Advertisement rates table with columns for page count and price.

明治卅八年十月十五日印刷發行

發行所 統 一 團
井村 恂也
山根 顯道
鈴木 暉學
北澤活版所

東京市淺草區南松山町四十五番地



本誌の特色

本誌は全國鐵道の停車場に備置
 きあれば其廣告は全國の公衆一
 般に知らるゝ便宜あり

（昭和三十三年二月四日第三種郵便物認可） 毎月一冊